



須磨源氏

第五号 平成29年8月1日

「須磨源氏」(すまげんじ)原作ストーリー

「須磨」・「明石」の巻を典拠とする「須磨源氏」26歳の春、源氏は朧月夜とのあやまちから官位を剥奪され、須磨に身を引き、侘しく都への寂しさが募る日々を過ごします。上巳の日、開運の祓いをしようとしていると暴風雨に襲われ館も落雷にあいますが、危うく命は助かります。その夜、「住吉の神の導きのままにこの浦を立ち退くように」と桐壺院の霊が源氏の夢枕にあらわれます。翌日、明石の入道が船を仕立てて源氏を迎えにきます。入道は一人娘である明石の君を源氏に嫁がせたいと願っています。源氏は入道の念願を聞き入れ、箏の名手である明石の君を受け入れます。

世阿弥が描く幽玄な世界「須磨源氏」伊勢参宮を志した日向国宮崎の神主・藤原興典(おきのり)が須磨に立ち寄ると一人の老樵夫が桜を眺めて涙しています。その桜は光源氏にゆかりのある「若木の桜」で、翁は光源氏の挫折と位人臣(くらいじん)を極めた一生を語り、光源氏は 兜率天(とそつてん)に生まれ変わり、そこで永遠に生きていけると言ふと雲に隠れます。夜、興典の夢に打ち寄せる波の音に混じって音楽が聴こえてきます。月光の輝く須磨の浦に、「青海波」の遊楽に引かれた光源氏の霊が天下って舞を舞い、明けそめた春の空に姿を消していきます。

◆宗家の語る見どころ

前半では光源氏の経歴を滔々と謡いあげます。

「帚木(ははきぎ)の巻に中将、紅葉の賀の巻に正三位に…」花宴(はなのえん)、須磨、明石、漣標(みおつくし)、少女(おとめ)、とその栄華が語られていきます。最後に「藤の裏葉に太上天皇、かく楽しみを極めて光君(ひかるきみ)と申すなり」立身出世が続き、栄華を次から次に手に入れた源氏の経歴が語られます。

これを知っていると、ちょっと能通！その壱

この曲は京都を中心に活躍した田楽の喜阿弥がつくった謡物を世阿弥が幽玄な能に大成させたものと考えられています。当時、世阿弥が成功するまでは、京都は田楽が流行し、都の周辺の奈良、摂津、丹波、越前、伊勢等は猿楽が人気があったようです。2つの違いは、猿楽は物まね芸を得意とし、田楽の方が幽玄であったと言われています。

後半では、貴人の霊が華やかに舞う、軽快な〈盤渉早舞〉が見どころです。

お能では、面や作り物、舞、お囃子という言葉や具体的な物にあらわされずに表現されるものがたくさんあります。たとえば、光源氏は、高貴な平安貴族等を表現するのに用いられる色白で眉根を寄せた表情に哀愁が漂う美男の面「中将」をつけます。盤渉調(ばんしきちょう)の高い調子の笛の音は「水」に関係するもので、波の音が聴こえる須磨の地をあらわしています。

これを知っていると、ちょっと能通！その三

能の調子は、基準となる黄鐘(おうしき)調、高い調子の盤渉調。そして平調(ひょうじょう)の3つに分かれています。盤色調で演奏されるのは、例えば「融(とおる)」は塩竈の浦、「唐船(とうせん)」は中国への船出。「天鼓(てんこ)」の主人公は呂水(ろすい)に沈められてしまいます。「邯鄲(かんたん)」は雨が多い地域というように、盤渉調で舞われる背景には、水が関係していると想像して鑑賞してみましょう。また「高砂」の“神舞”は通常、黄鐘調で舞われますが、舞台開きの時だけ、この舞台が火事にあわないようにとの願いを込めて、盤渉調で神様の舞が舞われます。

目を閉じて謡の文句を頭に思い描いてみれば、月の光と一体化した光源氏が「青海波」を高雅に舞う姿が浮かび上がってきます。

※兜率天(とそつてん)…菩薩が住む清らかな天上世界のこと。須磨は兜率天を往還するにふさわしい清浄感みなぎる天地とされる)

※若木の桜…『源氏物語』に登場する木で、須磨で不遇の生活をしていた時に植えた桜とされる。

※早舞(はやまい)…高貴な男性や成仏した女性が舞う舞。

※盤渉調(ばんしきちょう)…笛の調子で、常より高い調子をいう。

